慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | デェィヴィッド・ヘイ著 シェフィールド地域の農村鉄加工業者 : 産業革命以前における農村工業の研究 |
| Sub Title | David Hey: The rural metalworkers of the Sheffield region : a study of rural industry before the industrial revolution |
| Author | 大貫, 朝義 |
| Publisher | 慶應義塾経済学会 |
| Publication year | 1974 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.67, No.9 (1974. 9) ,p.809(71)- 815(77) |
| JaLC DOI | 10.14991/001.19740901-0071 |
| Abstract | |
| Notes | 書評 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19740901-0071 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

不明に終ったことも問題である。そのため，具体的に古河鉱業がどのような被害を与え，それにどのような責任をもつのかということもあいまいのままになっている。

さらに，いわずもがなのことであるが，この調停にかかわるのは毛里田地区の農民971人のみであり，他地区の農民の問題はまったく今後の問題としてのこされていることも忘れられない。この点は，毛里田地区の根絶同盟会が今後他地区といかに連帯し，いかなる役割をはたしていくかにもかかわる問題である。

以上の調停条項そのものの問題とは別に，毛里田地区鉱毒根絶同盟会としては，調停を受諾したことにより，当然ながら新しい多くの問題をかかえこむことにもなった。たとえば，一括払いとされた補償金の配分問題（この点にかんしては，補償金が被害面積に応じて配分される方法をとることで，7月1日から順調に分配作業がすすめられているが），先に指摘した渡良瀬川沿岸の他地区さらには全国の反公害団体・運動との連帯の問題，公害・鉱毒の「根絶」をめざす団体である以上，根絶まで今後もさらに運動を展開する必要があり，じっさいに調停成立後も根絶同盟会はさらに幅広い運動を展開することを訴えているように，今後の運動のすすめ方，調停条項にある公害防止協定のあり方・内容にもかかわるが，将来の鉱毒発生にたいする対策や渡良瀬川の水質基準強化の要求等がそれである。ここでとくに全国の反公害団体・運動との連帯を，根絶同盟会についていうのは，足尾の事件が近代の公害第1号事件として，きわめて重味をもっていること，および水俣病，イタイイタイ病，土呂久鉱害等の諸鉱山の公害のように人体にも目にみえて被害がおよぶ事例だけではなく，主に農作物や土地にたいする被害のような事例にも，資本は補償をせざるをえなくなる状況の到来を象徴する事件であることにかかわっている。

もちろん，古河鉱業側にとっても，以上の根絶同盟会にとっての問題が，裏返しとしてではあるが，ほぼすべてがかわってくる問題であることはいうまでもない。

以上のように，本年5月11日の調停の調印は，足尾鉱毒事件をめぐってはじめて双方が合意・受諾する到達点であったということがいえる。多くの問題をのこしているとはいえ，その点は否定することのできない成果である。これを有力な支えに，なお今後にのこされた多くの問題にたいしても，根絶同盟会および反公害運動は解決にまい進しなくてはならないだろう。とくに，反公害思想の普及にもかかわらず，なおわが国の政府や資本家には，成長第1主義や公害にたいする根底からなる反省がみられないことを考えれば，ここで運動を終りにすることなく，さらなる努力が必要とされるであろう。

（経済学部助教授）



# 書評

デェイヴィッド・ヘイ著

## 『シェフィールド地域の農村鉄加工業者』*
## ——産業革命以前における農村工業の研究——

David Hey: The Rural Metalworkers of the Sheffield Region—A Study of Rural Industry before the Industrial Revolution— (Leicester University Press, 1972, pp. 60)

### 一

本書は，次のような構成がとられている。

Ⅰ　序
Ⅱ　農工兼営経済（A Dual Occupation）
　1.　鎌鍛冶工
　2.　刃物鍛冶工
Ⅲ　釘鍛冶工
Ⅳ　製釘業の組織
Ⅴ　工業化の母体

さて，表題や構成からも明らかなように，本書は，中世以来のイギリスにおける製鉄・鉄加工業の一大中心地であり，特に刃物の製造をもって知られるシェフィールド地域に農村工業として広く展開した鉄加工業を，16～18世紀の鎌・刃物製造業及び製釘業を中心として考察することにより，この地域における工業化の母体，産業革命の基盤としての農村工業，更には農村社会の意義を明らかにすることを意図したものである。

すでに指摘され，また本書でも述べられているように，立地条件に恵まれたシェフィールド地域の鉄加工業は，すでに13，4世紀には後世と類似の分布を示しながらチョーサーの『カンタベリ物語』において言及されるほどの特産物としての名声を博し，更に16世紀までには国家的な重要性を確立して製鉄部門の発達を促し，こうして17世紀前半には西部ミッドランズ（バーミンガム地域～シュロップシャ），ウィールド（ロンドンを中心とするサセックス・ケント等東南部）地域と並び立つ製鉄・鉄加工業の三大中心地を形成するに至ったとされている。しかし他方では，西部ミッドランズの繁栄の前に，市民革命期以降まず封建貴族層を所有・経営者とするウィールド地域が森林の枯渇もあって急速に衰退し，次いで18世紀前半にはシェフィールド地域も停滞から更に衰退の方向に転じていくこともまた，指摘されている。そして本書の叙述に多くの比重を占める製釘業に関しては，当時の鉄加工業に占めるその量的比重が相当のものであり，18世紀前半には小規模マニュが多数成長しつつあったとされながらも，他の鉄加工業諸部門と比較した場合技術的にはなお低位の段階にとどまり，経営規模の零細性と相俟って保守的な問屋制前貸人に活躍の場を提供したため，一般にその傾向にあった鉄加工業のなかでもとりわけ産業資本の発達が遅れた部門であったこと，従って資本主義の発達という視点からは，製釘業をもって18世紀の鉄加工業の事情を代表するものとして扱うことは妥当であるとは言えないことが指摘されている。更にその場合，このシェフィールド地域の製鉄・鉄加工業の衰退の原因として挙げられているものをみると，製鉄業の市場としての鉄加工業諸部門が，最も長期間にわたって事実上の権威を維持した強制的な組合とされる「刃物製造業者組合」the Cutlers' Company に包摂されてゆく過程で守旧的性格を強め，生産も停滞的となったこと，更にそれに対応して製鉄業が停滞・衰退を来したのみならず，製鉄業自体においても技術的停滞と守旧化がその市場をますます狭隘なものにしていったこと，などが基本的な要因とされているのである。(1)

* 著者のヘイ氏は，レスター大学・イギリス地方史学科の農業史の Research Fellow であり，本書もアラン・エヴェリットの編集になる occasional papers の第二集・第5冊として刊行されている。本書は著者がレスター大学に Fellow として奉職中に行った研究の成果であり，当時レスター大学に Lecturer として奉職されていたピーター・マサイアス教授の助言に対して，感謝の意が表されている。ヘイ氏は主として南部ヨークシャの地域史研究を進めておられるようであり，著作としては 'The 1801 Crop Returns for South Yorkshire' (Yorks. Arch. Journal, XLII, pt. IV, 1971), The Village of Ecclesfield (1968) などのほか，特に本書の基礎をなすものとして 'A Dual Economy in South Yorkshire' (Agricultural History Review, XVII, pt. II, 1969) pp. 108-119 が挙げられている。ただし，半農半工の農工兼営の状態を表わすものとして前稿では『二重経済』'dual economy' という用語が用いられていたのに対し，本書では低開発国の問題との混同を避けるために 'dual occupation'（『農工兼営経済』と訳出）に改められている。

注（1）　以上の諸点については，特に大河内暁男「近代イギリス経済史研究」（岩波書店，1963），ポール・マントウ著，徳増・井上・遠藤訳「産業革命」（東洋経済新報社，1964）369～428，508～510頁（Paul Mantoux, The Industrial Revolution in the Eighteenth Century, new and revised edition, 1968）。

それでは，シェフィールド地域の製鉄・鉄加工業について従来指摘されてきている以上のような推移との関連において，ヘイの問題設定をどのように理解したらよいのであろうか。或いは，この地域において農村工業（鉄加工業）がその工業化，産業革命の基盤になったという場合――周知のように，こうした発想自体はむしろひとつの通説的立場を占めるものであるが――このヘイの主張はいかなる意味においてなされているのであろうか。

## 二

ヘイの所説の概要を紹介するならば，以下の通りである。

(1) まず分布についてみると，農村鉄加工業が集中的に行われたのは，第一に，リブリーからリーズ，ウェイクフィールド，バーンズリーを経てロザーラムに至る線で炭層砂岩地帯 coal-measure sandstone region を二分した場合，その西側で且つコルダー川以南の酪農業に重点を置く混合農業地域，第二に同じくコルダー川以南の牧畜経済を営むペナイン山脈の山麓丘陵地帯 the Pennine foothills，これを要するにコルダー川以南の地味痩薄なシェフィールド周辺の大教区においてであり，ヨリ肥沃で穀作農業に適する東部では，このような集中的展開がみられたことは曾てなかったという。

ここに言うシェフィールド地域とは，ほぼ北はコルダー川から南はステーブリーまでの地域を包括する，南部ヨークシャ及び北部ダービーシャのこれらのシェフィールド周辺教区を指し，シェフィールドを中心とする半径10マイルほどのこの地域には，1672年の炉税徴収報告によれば600近い鍛冶仕事場が存在した。そして，確かにシェフィールドのタウンシップ内にも鉄加工業者のヨリ高い分布密度――しかもその大部分は農場をもたず，4分の3が2つ以上の家内鍛冶炉を有する――をもって都市加工業が営まれたが，鉄加工業者の大部分は農村乃至半農村に居住して概ね1，2の家内鍛冶炉をもって農工を兼営し，16，7世紀ともなれば製品別の明瞭な地域的特化をみせつつ半工業社会を形成していたことが指摘されている。

(2) 次にこの地域の鉄加工業の立地条件としては，熔鉱炉用木炭・諸種産鉄・鍛冶用石炭・研磨用砥石などすべての原材料の地域内供給，及び動力源としてのペナイン川水流，伝統的な技術とそれまでに投下された資本の所在など，従来指摘されてきている諸条件がまず挙げられ，それに対する制約条件は――特に，ドン川が航行可能となる1730年代以前の――交通の不便のみであったことが指摘されているが，これらにも増してヘイが重視するのはサースクによる農業社会類型という視角であり，農村工業の分布と特定の社会構造との合致という事実である。(2) すなわち，この地域の農村は，夥しい数の自由保有農やそれと殆ど同等の安定した保有権を有する謄本保有農が小規模農場で牧畜経済を営む，小農民の人口稠密な社会であり，その限りでサースクの指摘する半農半工の手工業者による農村工業の繁栄のための条件を満たすものであった。しかもヘイによれば，同様に兼業農民 part-time farmer であるとはいっても，ハリファックス教区の織布工やバーミンガム地域の金属加工業者に較べると農場収入はこの地域においてヨリ大きく，それに対応してこの地域の農村鉄加工業者はヨリ富裕な状態にあったという。

(3) さて，加工業の個別部門に目を転ずると，まず鎌鍛冶工の事例として挙げられているのは主として16，7世紀の北部ダービーシャのそれであるが，南部ヨークシャをも含めてこの地域のすべての農村鎌鍛冶・研磨工が，その他のあらゆる借地農手工業者 craftsman-farmer と同様，小農場を有して半農半工の農工兼営経済を営んでいた。その規模は，ひとつの鉄床と鞴とをもって自ら作業に従事する者が多く，2人の者が跳ハムマーを使用して1日に5ダースの鎌の刃を生産したが，それはなお季節的な活動にとどまったとされている。しかしダービーシャのノートン教区――少なくとも16世紀以降，この地域の鎌の生産を事実上独占したとされる――には，小雇傭主から更には製鎌業を組織的に営むヨーマンやジェントルマンの製造業者が存在し，彼らは各所に研磨用水車や鍛冶仕事場・諸道具を有して，彼のために鎌を生産する鍛冶・研磨工に対して諸設備を賃貸し，数百～二千にのぼる各種の鎌の在庫を各所に有していたことからも窺えるように，相当規模の生産を行っていた。その原料鉄は，アタークリフ鍛鉄所を中心とする製鉄所（「シェフィールド・グループ」）を賃借経営する地域内の製鉄業者によって供給される一方，製品は専ら北部の市場町に売却され，ウスターシャの鎌製造業地域との間には明瞭な市場の分割がみられたという。

(4) 次に農村刃物製造業地域の例としては，17，8世紀南部ヨークシャのエクルズフィールド教区（炭層砂岩地帯）及びスタニングトン・タウンシップ（ペナイン山脈脊梁地帯）が挙げられている。主として安価な普及品の生産に従事した農村刃物鍛冶・研磨工は，そのなかにヨーマン織元と同等の地位にあるヨーマン刃物鍛冶工を含みつつ概ね小農場を有して農工兼営経済を営み，平均総遺産額に占める農場資産の割合は20～40%，鍛冶諸道具の割合は13%であった。

これに対して，高級刃物の生産に特化したシェフィールド市内及び隣接のアタークリフ・タウンシップでは，17世紀末から18世紀初頭には鉄加工業者を中心とする諸手工業者の比重が既に相当の高さに達し，諸鍛冶工が農業をも兼営する機会はヨリ限定されたものとなっていた。自己の収入を補うべき農場資産を有する者が殆ど存在しなかったため，たとえば17，8世紀のアタークリフにおける鉄加工業者の平均総遺産額は農村鉄加工業者の4分の1であり，それに応じて生活水準も低かったという。

シェフィールド周辺一帯のハラムシャ地区に対しては，1624年に「刃物製造業者組合」の諸規則が認可され，17世紀後期には釘鍛冶工を除く諸鍛冶工をも加えた「カムパニー」として守旧的傾向を強めていくことになる。

(5) さて，すでに述べたようにヘイは本書の多くの部分を製釘業の叙述にあてているが，このことは，地域経済及び鉄加工業自体に占める製釘業の比重や，製釘業が地域内の製鉄業（者）の産鉄の多くの部分を消費してそれと密接不可分の関係にあったという事実や，更には中産の借地農釘鍛冶工 nailer-farmer―釘商人 nailchapman（仲買人 middleman）のなかから産業革命期の新たな工業指導者（製鉄業者）層が輩出したという事実にもかかわらず，従来それが不当に看過乃至過少評価されてきたという，彼の主張にもとづくものである。

1672年にシェフィールド地域に存在した600ほどの鍛冶仕事場のうち製釘用のものは100を数えたが，製釘業は創業のための熟練と資本を殆ど必要としない点において，農村鉄加工業のなかでも最も農村的なものであったとされ，「刃物製造業者組合」にも結局加入せずに終った唯一の部門であった。その中心地域は刃物製造業地域の外側に，そして地域内の截鉄所の数マイル以内に位置し，特に高地地帯 Highland Zone の脊梁地及び森林地の外延散村 outlying hamlets に高い分布密度をもって繁栄したという。更に，製釘業の中心地としてのエクルズフィールドの繁栄は，こうした截鉄所や交通路の配置もさることながら，何よりもまず製釘業の発展を制約するような大所領が存在しなかったという事実に基づくものであった。製鎌業や刃物製造業の場合と同様に，製釘業もまた兼業農民によって営まれたが，この農工兼営経済においては農業の占める比重がヨリ大きく，従って当然のことながら，収穫期には釘の製造が中止される本来的に季節的な事業であった。また釘鍛冶工の間では，そのなかに少数の適度に in a mild sort of way 裕福な者を含みつつかなりの貧富差がみられ，特に小農釘鍛冶工に出自する重立った釘商人 nailchapman はある程度の資産家で，ヨーマンやジェントルマンの地位にあったことが指摘されている。

(6) すでに述べたように，シェフィールド地域では加工業の発達に対応して早くから製鉄業が営まれ，17世紀中葉以降には，しばしば最大級の土地所有者の所領に所在する鍛鉄所及び截鉄所を賃借した，ジェントリ的地位にある地域内の製鉄業者によって，鉄加工業者に原料鉄が供給されていた。ただしその場合，製釘業を除く地域内の鉄加工業諸部門 secondary metal trades が，18世紀を通じてハルを介するスウェーデン及びロシア産のヨリ良質な原料鉄の輸入への依存度をますます強め，特に1750年代には「刃物製造業者組合」がアメリカ産鉄の持続的輸入を請願して地域内の製鉄業者と対立したのに対し，17，8世紀の製釘業は地域内産鉄の大きな部分を消費したのみならず，1720年代以降には製釘業そのものが地域内製鉄業者のもとに組織されていくことが指摘されている。本書においては主としてこの製釘業との関連において，製鉄業が取り挙げられている。

さて，南部ヨークシャ及び北部ダービーシャの旧来の製鉄業は，鉄鉱山・木炭用森林・熔鉱炉・鍛鉄所・〔截鉄所〕からなる製鉄業の小グループが，スペンサー家の活動を通じて一連のパートナーシップによって相互に結合され，こうして17世紀後期までには，姻

注(2) Joan Thirsk, 'Rural Industries in the Countryside', in F.J. Fisher ed., Essays in the Economic and Social History of Tudor and Stuart England, 1961, pp. 70-88, do., 'The Farming Regions of England', in J. Thirsk ed., The Agrarian History of England and Wales, vol. IV, 1500-1640, 1967, pp. 1-15, do., 鵜川馨訳「イギリス経済における農村工業（講演）」（立教67号，1972）4～10頁。なお，E.L. Jones, 'Agricultural Origins of Industry' (Past and Present 40, 1968) pp. 58-71 をも参照。

戚関係とクェーカーの信仰とによって緊密に結合された，スペンサー家を中心とするジェントルマン製鉄業者 gentlemen-ironmasters のグループ 'Spencer Syndicate' の掌握するところとなった。パートナーシップはたえず変化したが，スペンサー家は常時加わると同時に可能な限り持分を増大し，この地域の代表的な製鉄業者としての地歩を築いたとされている。(3) この製鉄業の中核はワートリー，アタークリフ，ステーブリーにあり，たとえば1690年代のアタークリフ・グループは，銑鉄と frying-pan をロンドンを始めとするヨリ遠隔地の諸都市に売却する一方，桿鉄，棒鉄及び鍛鉄，線材 wire は，それぞれ地域内の釘鍛冶工，刃物・鎌鍛冶工，針金伸線工 wire-drawer に供給していた。特に17世紀末のワートリー及びロザーラムの戴鉄所は，南部ヨークシャの釘鍛冶工に対する桿鉄の唯一の供給者であったとされ，両戴鉄所からの桿鉄の総売却額のうち8％弱がシェフィールドの刃物仲買商 cutlery factors に売られたほかは，残りの大部分が地域内農村の釘商人を介して釘鍛冶工に供給・消費されたという。

しかし1725年以降には，製鉄業者の集団 'Spencer Syndicate' のパートナー乃至はスペンサーみずからが製釘業に進出する，という変化がみられた。すなわち，スペンサーは，倉庫を有するハウブルック在住の代理人ダードンの直接監督下に，釘鍛冶工を雇用する小製釘工場を経営する一方，ダードンや地域内農村の釘商人との間に，釘鍛冶工に対する前貸しとその製品（釘）の集荷とを代行する契約を結ぶことによって，釘鍛冶工をそれぞれの鍛冶仕事場でスペンサーのために生産する自宅職工 outworkers として広く組織するという方法をとった。ただし，そこでは同業者間の労働力争奪が釘鍛冶工の立場を強化し，また釘商人が桿鉄の購入先や釘の売却先をみずから決定しつつ独立的に活動したことも，指摘されている。そしてダードンにより集荷された釘は，ロンドンの代理人を経由してロンドンの金物商に売却され，あるいはアメリカに輸出されて，ロンドンはこの地域の製釘業の主要市場をなしていたが，北部諸州もまたその市場として重要な地位を占めたという。

## 三

さて，再び本題に戻るならば，シェフィールド地域における農村工業の意義に関する前記のヘイの立論は，以上の骨子をふまえつつ，その論旨に即して理解する限り，次のような意味においてなされていると言いうるであろう。すなわち，半農半工の借地農鍛冶工のもとでの「小保有地と鉄加工業の複合」smallholding and industrial complex，「牧畜経済と鉄・鋼の加工業とに二重に基礎をおく農工兼営経済」，「農工業が幸福に結合された健全な経済」――これが，その初期には比較的農工の均衡を保ちつつこの地域の農村鉄加工業の繁栄と鉄加工業者の豊かな生活水準を実現し，穀作地域よりも貧富の隔差の小さい広汎な「民富の形成」を推し進める基盤となったのである，と。そして更に，鉄加工業の繁栄と製釘業に始まる徒弟奉公規制の無力化とが，この地域の人口を他の地域に先行して増加させたことによって18世紀前半には農地の不足を来し，また19世紀以降，鉄加工部門において機械制生産が普及すると，若干の例外を別とすれば基本的に農工兼営経済として営まれた旧来の農村鉄加工業において，まず農業部門の比重がますます低下し，次いで家内生産そのものが崩壊・掃滅されていくが，その過程において，旧来の農村鉄加工業はこの工業化の指導者，労働力，技術的熟練，投下資本の多くの部分を提供し，かくしてこの地域における工業化の母体，産業革命の基盤となったのである，と。このことは，製鉄部門において18世紀中葉を画期としてスペンサーを中心とするジェントルマン製鉄業者による旧木炭製鉄業が衰退する一方，(4) ウォーカー兄弟 Samuel and Aaron Walker やブース John Booth の如き18世紀後半の新しい製鉄業者層が地域内農村の「借地農釘鍛冶工」，「小農釘鍛冶工」を基盤として，特に小規模に創業し長期間製釘業に従事した家族に出自する釘〔仲買〕商人層のなかから，輩出することを意味していた。しかも，シェフィールド自体はこの地域における「力と豊かさにみちみちた新しい工業中心地」，実質上の「農村の工業町」(5) とさ

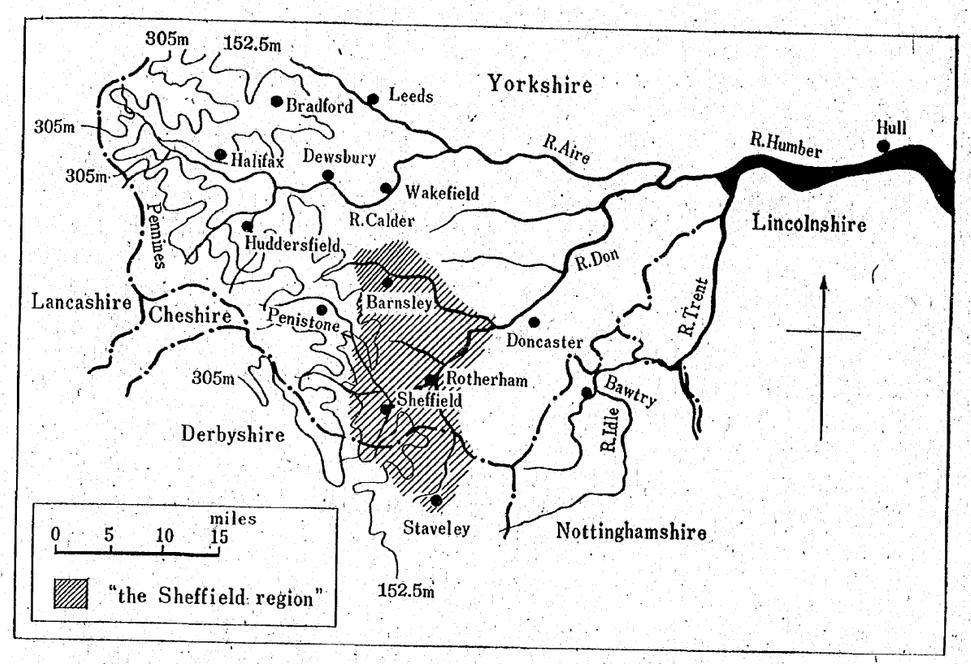
注（3） 以上の点につき，A. Raistrick and E. Allen, 'The South Yorkshire Ironmasters (1690-1750)' (Economic History Review, old series, IX, 1939) pp. 168-172 をも参照。なお本論文については，大塚久雄「レイストリック，アレン『南ヨークシャーの製鉄業者（1690-1750年）』」（「経済学論集」10の3，1940，のち「大塚久雄著作集」第5巻，岩波書店，1969，250～256頁）において紹介されている。

（4） A. Raistrick and E. Allen, op. cit., pp. 176-185 をも参照。

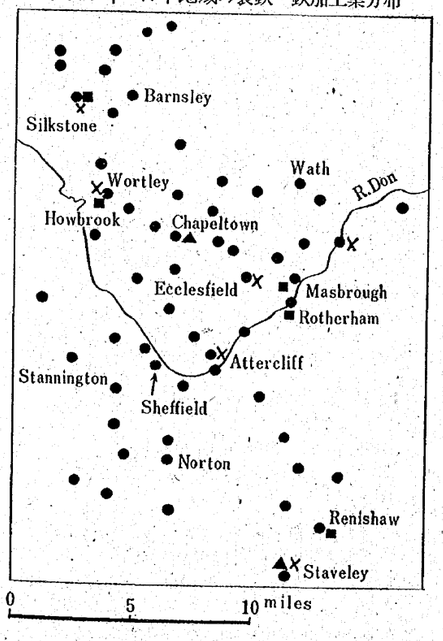
（5） ピレンヌ著，大塚・中木訳「資本主義発達の諸段階」（未来社，社会科学ゼミナール 1，1955）50，92頁。








シェフィールド地域の製鉄・鉄加工業分布




▲熔鉱炉
×鍛鉄所
■戴鉄所
●鉄加工業

D. Hey, The Rural Metalworkers～, p.6 の図，及び本文，A. Raistrick and E. Allen, op. cit., pp.168～169，より作成。

れているのであり，ヘイは産業革命の推進主体としてのシェフィールドの刃物仲買商人層の役割，及び――中産層の広汎な鉄製品需要と並んで――アメリカ市場の重要性にも言及してはいるが，都市刃物仲買商の多くが農村鉄加工業者に出自し，しばしば新たな製鉄・製鋼業を創始して農村工業―産業資本の利害に密着した存在であったことも指摘されており，基本的には曽て大塚氏が指摘されたイギリス農村工業史上における「北部型」[6]の典型的な例とみることができよう。

以上のような意味において，ヘイは，イングランド北部やミッドランズでは小農鍛冶工による農工兼営経済が工業化の母体となったことを指摘するのであり，その論旨展開においては，資本主義の発達という視点は必ずしも明瞭でないが，基本的には大河内氏が西部ミッドランズ地域について明らかにされた製鉄業の小生産者的発展の基本線を，シェフィールド地域についても確認するものとなっている。他方，一国的観点でみるならば，シェフィールド地域は基本的に刃物類を中心とする鉄加工業地域であり，銑鉄生産の比重は必ずしも大きなものではなかった。また，「刃物製造業者組合」による規制と守旧化（ハラムシャの刃物製造業者は，18世紀中葉以降ハンツマンによってアタークリフで生産された鋳鋼の購入を，その初期には拒絶したとされている），独立家内生産者の強固さと繁栄，製釘業の比重とそこに君臨するジェントルマン製鉄業者の存在などは，この地域における産業資本主義の発達を遅らせる要因となり，新・旧製鉄業者の交替期も18世紀後半であった。しかしながら，レスター学派の立場に立つ著者は，産業革命の地域的な，また部門別の多様性を強調する一方，ラスレットやメンデルスの見解に依拠しつつ，[7]この時期を「原生的な工業化」proto-industrialization――伝統的な小規模の工業組織形態のもとでの，人口増加による過剰労働力に支えられた生産の増大――の局面として評価するのである。

## 四

さて，最後に近世日本の鉄加工業との比較において興味深く思われる点をいくつか指摘して，本稿を終えることにしたい。

まず第一に注目される点は，シェフィールド地域の場合には農村工業としての鉄加工業が製鉄業と密接な関連をもって同一地域内に営まれ，しかもその産鉄の多くの部分を消費しているという事実である。これに対し，近世日本の製鉄業地帯においても，特に後期には鉄加工業の一定度の発展と産鉄の地域内流通・消費量の増加をみるが，近世日本の製鉄・鉄加工業は基本的には幕藩制的分業・市場関係の一環として，すなわち，特権を付与されると同時に専売統制下におかれた「特殊経営」[8]としての中国地方諸藩における製鉄業と，中央の三都及び堺を中心とする都市（城下町）鉄加工業という立地上の分化，及び両者を結ぶ，特権的鉄商に把握された産鉄の隔地間流通という形で，出発したのであり，近世中・後期には――藩権力による直接的統制策の緩和と対応して――製鉄業地帯と地方に新たに形成された鉄加工業地帯とが直接の交易圏によって結ばれ，更に幕末期には再び強化された諸藩の統制策がむしろこの傾向を助長したとしても，この基本的特質はなお残存するのである。

第二に，このような立地上の分化―社会的分業の編成と対応して，近世日本における製鉄業者と鉄加工業者との間には截然たる区別があり，シェフィールド地域の場合とは異なって，そこでは農村鉄加工業者乃至はそれに出自する鉄製品問屋が製鉄業者へと成長する場合も，また逆に製鉄業者が鉄加工業を兼営する場合も，殆どみられなかった。[9]

第三に，これもまた以上の点に関連することであるが，シェフィールド地域に農村鉄加工業が集中的に営

注（6） 大塚久雄「近世経済史上における農村工業――とくに西ヨーロッパについて」（大塚久雄「近代資本主義の系譜」，第9，学生書房，1947，のち「大塚久雄著作集」第3巻，1969，297～313頁）。

（7） Peter Laslett, 'Personal Discipline and Social Survival' in P. Laslett, The World we have lost, second edition 1971, p. 157, Franklin F. Mendels, 'Proto-industrialization; The First Phase of the Industrialization Process' (Journal of Economic History, XXXII, No. 1, 1972) pp. 241-249.

（8） この概念については，佐々木潤之介「幕藩制の構造的特質」（「歴史学研究」245号，1960）9頁，同「幕藩権力の基礎構造――『小農』自立と軍役――」（御茶水書房，1964）28～31頁。なお，中井信彦「幕藩社会と商品流通」（塙書房，1961）138～142頁をも参照。

（9） 近世日本においても，幕末・維新期に小鉄師（「農間稼小鉄師」乃至――本来の意味における鉄師ではないが――「農民的鋼商人」）の族生がみられ，また近世後期には産鉄問屋が鉄師に転化した事例もみられたが，前者は必ずしも鍛冶（鉄加工業者）出自ではないと同時に小生産者的発展へと繋がるものでもなく，後者もまたシェフィールド地域の場合





まれたことを考慮した場合，特に近世後期の日本において，農村工業としての鉄加工業が特定地域にはたしてどれだけの密度をもって展開されたかということが，あらためて問題とされるべきであろう。水田稲作経営を基本とする日本においては，兼営のための条件は言うまでもなく全く異なったものであったが，たとえば三木（播磨）や三条（越後）を中心とする周辺鉄加工業地域においては，近世後期ともなれば分布密度の上では農村鉄加工業が相当の展開をみせ，また幕末期・倉吉（伯耆）や木次（出雲）の千歯扱製造業は類似の兼営形態のもとに営まれていたことが，それぞれ明らかにされており，その具体的内容のヨリ一層の究明は，第一点とともに今後の研究課題を提供している。

第四に，以上の諸点は，近世日本の製鉄業地帯における製鉄業と周辺農村社会との関係のあり方，更に製鉄業そのものの基本的性格の問題に対し，照明を与えるものと言えよう。

本書を取り挙げたそもそもの関心は，近世日本の製鉄・鉄加工業史との比較に発するものであった。筆者が西洋経済史の専攻者ではないために，紹介が冗長なものとなった反面，看過した点や誤読があったかと思うが，そうした点については御寛容と御教示のほどをお願いしたい。[10]

大貫　朝義（経済学部助手）

とはその出自・存在形態を全く異にしていた。拙稿「近世鉄山業の研究動向と展望」（一）（三田学会雑誌66―4，1973）47～48，57頁を参照。鉄師（製鉄業者）による鉄加工業の兼営は，幕末期の山陰地方でも若干みられたが，東北地方では近世後半期に比較的多く行われている。森嘉兵衛「日本砂鉄の史的研究」下巻（法政大学出版局，1970）593～597，619～638頁を参照。

注(10) なお，以上の諸点に関連して，別稿（「三田学会雑誌」67巻12号）を予定している。また，シェフィールド地域については，学友の酒田利夫氏が地域史研究をすすめておられる由であることを付記しておく。